

Title	昭和三十四年度史学科秋季見学旅行記
Sub Title	
Author	野口, 誠(Noguchi, Makoto) 浦井, 正明(Urai, Shomyo) 山本, 實(Yamamoto, Minoru) 町田, 公雄(Machida, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.118(508)- 121(511)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

考えるなら示唆に止まったのも當然かもしれぬ。しかしそれは未來への實り多き示唆であり、又極めて現代的意識に支えられていた。それ故この示唆をより統一的、全體的なものたらしめることは肝要のことと言えようし、かかる新しい方向の第一歩として本書は意味深きものであろう。

尚本書の著者 Henry Vyverberg については筆者は詳らかにしなうが、Akron University の助教であり、C. Brinton に呈された本書における献辭よりして Brinton 教授との關係が推察される。

(一九五九、十、七、脱稿)

(米田 治)

## 彙 報

### 昭和三十四年度史学科秋季見学旅行記

昭和三十四年秋季の史学科見学旅行は目的地を奈良に選び、十月二十日より數日間をあてた。参加者も多く、行動の便宜の爲、班をわけて見学を行ったので、以下それぞれの分擔執筆にて旅行記を記したい。

天理市に到着して二日目の十月二十日、指導の浅子教授共々

我々二十名は秋晴の下、奈良市内コースを廻る事となり、天理市よりバスで二十分、近鐵奈良驛で下車、まず最初の目的地、興福寺へと向った。

興福寺境内に入り、南圓堂、五重塔を見學した後、この寺の佛像寶物の總決算とも云う可き寶物館へ向い、諸佛像を詳に觀賞した。ついで一行は博物館を見學の後、東大寺を訪れた。

雄大な南大門より境内に入り、まず大佛殿内を人波に押出される様にして一廻りした後戒壇院へ向う。ここまでは人の波も追っては來ず、院内の静けさの中にも、氣宇の雄大さを感じさせる様な、持國、增長、廣目、多聞の四天王像が立って居た。

奈良朝後期の作品である。戒壇院より法華堂へ向う。堂は三月堂ともい東大寺建造物中、最も古くかつ優れた遺構であり、本堂は天平年間の建立である。堂内には本尊不空羼索觀音像を始め、日光、月光菩薩像等著名な佛像が安置されている、法華堂を最後に東大寺を去り、新薬師寺へ向った。寺は普段と異り佛像の映畫撮影とかで人出が多い。本尊薬師如來像を拜す。十二神將の各像は映畫のライトにその面を照らされ、怒りの形相がさらに一段とすさまじく感じられた。(野口誠)

我々が薬師寺を訪れたのは午前八時を少し廻った頃であつたらうか。講堂を拜して奥に進むと、まだやわらかい朝の光が斜から射し込んで、東塔がその影をうっすらと落していた。淡い光の中に浮び上った塔は、さながら一幅の繪であつた。遠くフ

エノロサの言葉を想い、水面に映る水煙を眺め、秋師道人や信綱翁の歌を想うにつけ、何かしら心安まるものがあつた。金堂、佛足堂、東院堂と拜観の後、我々は此處を辭して唐招提寺へ向つた。修理中の門の脇よりほの暗い木立を歩むこと數十歩、我々は莊重な金堂の前に出る。金堂内の諸佛を拜した後石段の傍にある芭蕉の句碑に、鑑眞和上を偲びつつ、我々は近鐵の軌道に沿って徒歩西大寺へ向う。正午を廻っているとは云え、日射は晩秋のそれとは思われぬ程強かつた。澄み切つた青空、涌き出た様に浮ぶ白い雲、松の緑に覆われた垂仁天皇陵、赤く色付いた實を枝もたわゝにつけた柿の木、黄一色の麥畑、そしてその中を一直線に進む白い道、これらが混然一體と成つて我々の視野に飛び込んで來た時、『秋の大和の美しさ』此處に極まれりと云つた感があつた。日頃都會の喧騒の中に明け暮れしている我々だけに、この感慨は一夕であつた。漫歩すること約一里、我々は喜光寺(菅原寺)、菅原神社を経て南門より西大寺の境内に入った。閑靜な境内の廣さに比して、正面に残る塔婆の礎石と金堂(釋迦堂)のつつましきは、嘗つては東大寺等と並び稱されたであろう昔日の面影を求めるとは餘りにも荒れ果てたとの感を深くさせた。ただ、そんな中にもあの『善財童子』の無心な姿だけは、何か救いを與えている様に思われて心引かれるものがあつた。西大寺から足を伸して參詣した秋篠寺の坊藝天に別れを惜み乍ら、せかれる様に歸途に着いたのは漸

く日も傾きかけた頃であつた。(浦井正明)

## 法隆寺

法隆寺を訪れた。めまぐるしい觀光客の動きの中に、靜かに建っている五重塔があつた。我々は半ば諦めたように孤立している塔の下に立つて、入口で受取つた境内の配置圖を擴げた。建築史で云う法隆寺式伽藍配置がこれである。有名な壁畫を失つた金堂は、焼失以前の姿を知らぬ者にも一抹の寂しさを漂わせて迫つて來る。各時代の修理を経て、今日ある姿に接すれば價値あるものの儚さとか偉大さとかが、理窟抜きに觀賞者の心をうつのであろう。折から、有名な若手の映畫スター某々らの一團が見物に來た。新しいものへの魅力、新鮮なエネルギーを持つたものへの魅力、我々が若いスターや自分自身に求める魅力がそれならば、この場所はそうした魅力ある人間を歓迎する爲、我々の祖先が祈つた場所と云えよう。

中宮寺の半跏思惟像は、一體、何を考えているのだろうか。名聲や戀や金などの世俗のことではあるまい。救いの哲學の偶像は、ただ藝術家の命ずるまま、自分も又、藝術家たらんとして思考し續けているものと解釋したい。

暫く歩いて法輪寺、法起寺へ向う。黄金の襷りの波の彼方に、さつき見た法隆寺の塔が小さく見え隠れする。天候も申し

分なし。往古は信じられぬ程の信仰を集めていたであろうこれら末寺も、現在の觀光ブームにさえとり残された形である。

十月廿三日(金)、秋期旅行の最終日。我々一行二十三名は河北助教授、米田助手の指導のもとに最終コース室生へと向った。近鐵室生口大野驛下車後、台風の爲バスも通っていない道を皆元氣に一路室生寺へと歩を進めた。台風の爪跡も生々しく、道というものはなく、道を歩いているのか河原を歩いているのか分らぬくらいのものであった。あちこちには木のカブがひっくり返り、そのすさまじさは言語に絶するといっても過言ではあるまい。

行程約二里。日頃乗物に乗っている者にとって非常に苦痛であった事はいうまでもない。だが一時間半後にはあの人口に膾炙している華麗優美な五重塔を見上げる事が出来たのである。寺の人の話ではもう少しひどければこの寺もだめだったでしょうというっておられた處をみるとそのひどさが分るうというものである。一行は今迄の疲れも忘れて寺の人の案内で境内へと入った。丁度台風の影響や何やかやで見物客が少なく案内人の説明をのんびりと聞きながら彌勒堂では彌勒菩薩、一木彫り翻波式で有名な釋迦如來座像を見、室生山獨特の建物配置である金堂、本堂へと歩を進めていった。五重塔はいつも寫真で見ているのと異り、本當に木造建築の美しさが如實に表現されていることを深く感じた。時間の關係で奥の院は省略し、又二里の道

を帰路についた。途中で日が沈みかけ一段と山のしずけさ、美しさをもし出し、ここならではの感があり、秋期見學旅行最終日としては申し分ないものであった。又次の機会にと思いなから山を下っていった。(山本實)

### 飛鳥の里

天理大學のプールのスタンド上から眺めた大和三山の美しさは今でも忘れられぬものがある。周圍を山に圍まれ、一望の下に捕えられる奈良盆地の、さらに南の端によった、三つの山の向うの、小さな飛鳥の里から、古代日本を作り上げた、たくましい文化が生まれたのである。白壁のあちこちから見える柿の木を見ながら、落ちついた小さな家々をすぎ雷の丘、大官大寺跡、久米寺、飛鳥寺へと行く。行く所、見る所、全てに古代人の活躍のあとがしのばれる。久米寺では、美女をかいま見て、雲から落ちた仙人の話を思い出し、これが久米川ですよと教えられた川が、小川だったりして、今まで抱いていたイメージとずい分異なるので、驚きもし、おかしくも感じ、飛鳥寺では、中臣鎌足が、けまりにことよせ、中大兄皇子に近づいた故事を思いおこしたりした。岡寺、酒船石、石舞臺と吾々の見學が續く。石舞臺の墳頂に立って、島の庄一帶の稻田を見まわした時、馬子もやはりこの稻田を、美しいものと感じただろうと思

った。行く所、見る所、全てが歴史をきざんで行ったあとが感  
じられ、何の氣なしに通る過ぎる丘や古寺にも、歴史の断片が  
残されているかも知れなかった。薄雲りの空の下で、飛鳥の里  
は、過去に於て輝かしい文化をなしたげたもののみが持つ、し  
つとりとした落着きにつつまれており、ここから、後に唐の天  
子に、新興の烈々たる氣概をたたきつけた、古代文化が生まれ  
た所とは、仲々思えなかつた。この、のんびりとした静かな雰  
圍氣が、飛鳥の里が人々をひきつけるものなのだろう。ここに  
來た人は必ずもう一度行きたいと云うそうだが、それも、東大  
寺の豪快さや、薬師寺の優雅さに比すべきものがないにもか  
わらず、全體として持っている古代のおおらかさに通ずる土臭  
さがあるせいかも知れない。大和は美しい、と云う平凡なこと  
が、よくわかつた。(町田公雄)

終りに當り今回の見學旅行に際し、宿舍、便宜を與えられた  
天理教眞柱中山正善氏、中山善衛氏をはじめ、東井三代次氏、  
其他天理教關係の方々から感謝の意を表する次第であ  
る。又、見學に際し伊木壽一先生はじめ、淺子勝二郎先生、河  
北展生先生、米田治先生、志水正司先生より寄せられた懇切な  
御指導に厚く御禮申上げたい。

### 梅原末治博士講演會

(文學部共催)  
三田史學會

六月十九日 於三〇一番教室

銅鐸 新 攷

### グジнде博士講演會

(文學部共催)  
三田史學會  
日本民族學協會

十二月十一日 於三〇一番教室

(一) ニュージーニア・ピグミーについて

(二) カナカの祖先崇拜(十六ミリカラー映畫)

### 東洋史談話會

十一月十七日 於四十四番教室

おとし漁業の研究

可兒 弘 明君

十二月十八日 於三田・東機會館

西獨における東方學會の動向

牧野 信 也氏

### 第七回早慶連合史學會

早慶連合史學會第七回大會を昭和三十四年十二月五日午前十  
時から早稻田大學小野記念講堂において開催した。研究發表者